

【書評】

細川道久編著
『カナダの歴史を知るための50章』
明石書店、「エリア・スタディーズ」叢書、2017年

HOSOKAWA Michihisa (dir.)
50 chapitres pour connaître l'histoire au Canada,
Akashi-shoten, coll. « Area Studies », 2017.

佐々木菜緒
SASAKI Nao

カナダに関する入門書としては「エリア・スタディーズ」で5冊目にあたる本書の主旨は「カナダの歴史を知る」ことである。折しも、本書が出版された2017年はカナダ連邦結成150周年にあたり、国内でも日本カナダ学会シンポジウム「連邦結成150年—過去から現在、未来へ」が開催されるなど、カナダ史への関心が高まった象徴的な年である。「カナダ生誕150周年 (Canada's 150th Anniversary)¹」という表現に見られるように、1867年の連邦結成はカナダの「建国」とほぼ同義に位置付けられることが多いものである。しかしながら、今回の年祝はその象徴的な史実をめぐるよりも、むしろそれは一旦カッコに入れられ、今日カナダと呼ばれる土地空間をめぐるものが目立ったように思われる。CBC ラジオ・カナダに掲載された動画「カナダの本当の歳は？ (How old is Canada really?)²」はそうした意味で1867年に必ずしも端を発しない多角的視点によるカナダの「誕生」を提示している。

この多角的視点によるカナダ史観は本書においても中核をなしている。つまり各「視点」を提供するそれぞれの人々が歴史の主人公として描かれているのだ。一般的に西欧史と結びついたカナダ史は大陸が「発見」される歴史を軸に語り始められることが多く、先住民についての言及や英仏系以外の移民に関しては補足的であることがしばしばある。そのような中で、本書はカナダの土地を取り巻くあらゆる人と社会の変遷が穏やかに語られている。英雄史的な視点で飛び石のように歴史を進めるのではなく、途切れない水の流れのようにその時その時のカナダ史に携わった社会の姿が描かれている。先住民社会に限らず、ニューファンドランド、アカディア、メイティ社会、西部地域もその流れの一部であり、ドイツ系、南欧・東欧系、中国系そして日本人それぞれもカナダ史の構成メンバーである。特に興味深いのは、後者の移民集団に関してはそれぞれ独立した章が与えられており、大陸における各集団の移動と変遷が丁寧に描かれているため、読者は、今日の多元的な社会と言われるカナダの実態を単なる現状、結果として捉えるのではなく、どのような人の流れによって同社会が形成されていったのかを理解することができる。総じ

て、本書はカナダがいかに発展してきたかよりも、どのように変遷してきたかに関心があると言える。編者のことばを借りれば、「世界の歴史のうねりのなかで時を刻み、変貌をとげるカナダ」(p. 3) が描かれている。

本書は諸分野の専門家 27 人による 50 章からなり、大きく 7 部で構成されている。この 7 部構成は、さらに大きく 3 種類の内容に沿った編に支えられている。つまり、カナダ史の全体像を知るための「総論」、カナダ史の流れを知るための「通史編」、カナダ史の特徴をより個の次元から知るための「テーマ編」である。以下、各編と各部ごとの内容をまとめながら多角的な視点によるカナダ史を進んでみたい。

第 1 部「〈総論〉世界のなかのカナダ」では、具体的なカナダ史変貌の諸相に入る前の全貌が提示される。まずは 4 つの時期区分によるカナダ史の流れが図とともに、世界史と人の流れのなかで示される。後述の「通史編」はこの区分に沿って見ていくことになる。執筆者作成のこのカナダ史図は、カナダ史を文字どおり一望することができるもので非常に分かりやすい。次に地理的な観点から地形、気候、人口分布を概観することで「カナダの歴史的発展はきびしい自然環境への適応への過程」(p. 25) である点が紹介される。そして最後にカナダ社会を特徴づける英仏の二元論、多元論そして今日の多文化主義が触れられ、カナダ史には多種多様な出自を背景とする人々の活躍があることが確認される。

第 2 部「〈通史編〉先史時代からフランス植民地時代へ」では、カナダ(北アメリカ大陸)最初の住人である先住民からフランス人入植者までの社会変遷を知ることになる。つまり、大きく 6 つの文化領域に特徴づけられた先住民社会をとおして、元祖カナダ多文化社会の諸相を見ることができる。続いて、漁業基地としての植民地ニューファンドランド、毛皮交易地としてヨーロッパを魅惑したカナダの姿が描かれる。毛皮交易史をとおして読者はイギリスとフランス 2 つの力関係がカナダ史を支配することを知るだろう。そうして、仏植民地アカディアと現ケベックを中心とするヌヴェル・フランス社会の発展と終焉が順にたどられる。

第 3 部「〈通史編〉イギリス植民地時代」では、フランスからイギリスの支配下へと変容したカナダ社会が描かれる。ここでも筆者作成の「カナダにおける植民地・州の変遷」の図は一目瞭然と重宝な図である。残存したフランス系住民への諸対応策、隣国アメリカ合衆国(以後、アメリカ)の諸影響、カナダにおける地理的な英仏人口構成により 2 つの植民地が誕生する流れを眺望することで、読者は今日フランス語圏ケベックをめぐる問題の基礎を理解することができる。一方、対英米感情は自治意識を高め、高まった自意識は最終的にカナダの東から西までを統合する「強力な中央政府の下で経済的安定を図る連邦化案」(p. 97) を浮上させるに至るまで、国家としてのカナダの原点と言える「連邦結成」の発芽を見ることになる。

第 4 部「〈通史編〉国家的自立への模索」では、カナダの外交面および帝国内における自主権、発言権獲得の端点に位置付けられる「ワシントン条約」から、西部開拓と連邦拡大による諸問題を経て、「伝統的なイギリスとの連帯を確認する機会となった」(p. 167) 第二次世界大戦までを見る。国家的枠組みが進むなかで、先住民およびメイティ社会が周縁化されていく様子や、ケベック外におけるフランス語

の教育問題が語られる。また、南アフリカ戦争および第一次世界大戦でイギリスからの自立を強く意識するようになる一方で、英仏の帰属意識の相違から地域間の対立が顕在化していく様子が描かれる。

第5部「〈通史編〉第二次世界大戦後の発展」は、カナダ国内では「カナダ人」を規定し、国外では外交手腕を發揮し存在感を示していく姿を見せる。カナダ独自の「文化、芸術、学術の復興と発展を促すため」(p. 193)に政府主導で設立された機関カナダ・カウンセルや、4人のカナダ首相による4色の対米関係史をとおして国民意識がより強固になっていくと同時に、フランス系住民を中心としたケベック意識と同意識に基づく分離独立運動が生まれることを読者は知る。そして、地域間で言語的、民族的な諸比率が異なるカナダのような社会を統合するために一進一退しながら考え出された「二言語・多文化主義政策」および、「英仏系も少数民族系も超えたカナダ人統合の価値原理として」(p. 226)制定された「1982年憲法」の特徴が提示される。他方、西部（とりわけアルバータ）の地域主義運動の章は、現代カナダ史の縁の下の力持ちと言える西部諸州の姿を描いており、興味深い。

第6部「〈テーマ編〉カナダ社会と移民・先住民」では、カナダの生成と発展に深く寄与した集団、民族の動きに焦点がおかれている。すなわち、フランス系移民、イギリス系移民、ドイツ系移民、東欧・南欧系移民、中国系移民であり、先住民たちである。移民政策の今昔についても触れられる。フランス系については「現在のカナダの領域に最初に本格的な入植を試みたヨーロッパ人」(p. 248)のアカディア人からはじまり、「カナダ全体の政治や社会全般において主流であり続けてきた」(p. 254)イギリス系については、イングランド系、スコットランド系、アイルランド系に分けてそれぞれの移住背景の特徴が丁寧に解き明かされる。ドイツ系については、「ヨーロッパ東部に広大な領土を有した神聖ローマ帝国の各地域から移民してき[た]」(p. 261)北米大陸における多種多様な背景を持つ最大の一大集団として描かれる。東欧・南欧系については、主に西部への移民誘致以前から移住してきたイタリア系とユダヤ系と、西部開拓移民として歓迎されたウクライナ系、オランダ系、ポーランド系など移民時期と諸集団によって変遷する政策状況が説明される。19世紀カナダ大陸横断鉄道建設以降本格化した中国系移民に関しては、排他的白人社会のなかで形成されたチャイナ・タウン時代から、今日ミドルクラスの香港や台湾出身を中心として建設されているチャイニーズ・モール時代までをたどる。最後に、カナダにおける先住民社会の変遷を制度的な観点から見ることができる。

最終部を飾る第7部「〈テーマ編〉カナダと日本」は、私たちの国との関係史である。すなわち、移民、経済、外交、教育などに関して、カナダにおける日本人の歩みであり、日本におけるカナダ人のそれである。日本人移民については、漁業、鉱業、製材業、庭園業などに従事していくこと、時折アジア人排他の動きや第二次世界大戦中の人種差別の経験によって2世と3世の間に文化的な溝が生じていくこと、そしてその溝を回復するために日本人移民の意識化が進んだりドレス運動までの流れを知ることができる。日本におけるカナダ人については、明治初期以降、英語をはじめ西洋学問を学ぶ場として設立されたミッション・スクールの設立と変

容が描かれている。国内で出版された概論的なカナダ史に関する書籍で、8章にわたって日本との関係史を織り込んだものはほぼ皆無である。本書はこの新しい視点でもカナダの歩みを提示した貴重な書物であろう。「テーマ編」全体に関して一つ欲を言えば、それぞれの移民の移動についても世界史の流れとともに一望できる図または地図があると、より安心して読み進めることができるのかもしれない。

さてこのように、さまざまな社会集団や国、地域との関係のなかで起きてきたカナダの変貌をとらえて読者は何を感じるだろうか。おそらく、一筋縄で語るができないこと、である。先住民社会から今日にいたるまで、地理空間的にも民族構成的にもその変貌ぶりは著しい。しかしそれは、内外から翻弄された末というよりも、芯をすえながら右にも左にも行ける余裕、柔軟性ゆえとも言える。アメリカのような明確で強い統合理念がないカナダだからこそ可能なものであり、可能性である。そしてその芯とは、あらゆる人々がカナダ史の構成メンバーであるという実なのだ。そうしたカナダの多元性と可能性を豊かに示唆している意味において、本書は概説書であるだけでなく、今後のカナダ・ケベック研究の発展像を内包した、未来に向けての作品なのである。

(ささき なお 明治大学大学院博士後期課程)

注

- 1 Gouvernement of Canada / Gouvernement du Canada (2017). *Canada 150*. Repéré à <http://canada.pch.gc.ca/eng/1468262573081>
- 2 Christa Couture (2017). *Canada is celebrating 150 years of... what, exactly?* Repéré à <http://www.cbc.ca/2017/canada-is-celebrating-150-years-of-what-exactly-1.3883315>.

参考文献

- 大原祐子、馬場伸也編（1984）『概説カナダ史』有斐閣。
木村和男（1999）『カナダ史』山川出版社。
J. M. S. ケアレス（1981）『カナダの歴史 一大地・民族・国家一』清水博訳ほか、山川出版社。